

満州の花嫁の悲劇

新しい出発

① 満州開拓花嫁として、写真一枚で満州 三江省の弥栄村の石井儀三郎に嫁ぎ、三年目の昭和十四年九月に、西弥栄三分屯に生活の場を移し独立した。

そこはほとんどが原野で、地平線に赤く沈んでいく夕陽は、とても美しく雄大だった。長く厳しい冬が明けるとあらゆる花々が一斉に咲いて、人々の心にうるおいを与えてくれた。

二キロぐらい離れた所に現地人の集落があり、その人たちが開拓民の小作人として

※満州開拓花嫁：日本から、現在の中国東北部へ渡った農民移民団の人と結婚した女性。

※小作人：地主から土地を借り、小作料を払って農業をしている人。

家畜の世話から耕作まで手伝ってくれた。おまけに作物もよくできたので生活するには楽だった。

お正月になると小作人の家庭に招待され、饅頭や餃子でもてなしてもらった。そこには、身内同然のつき合いがあった。

昭和十二年に長女義子、十五年に次女洋子、十八年に三女政子、二十年四月に四女玉代を出産、女の子ばかりの四人の母となった。子育てに忙しかったが、主人も子供をととても大切に自分で子供たちを風呂に入れないと気がすまないほどだった。散髪もするし、下駄までも作ってくれる。雨が降れば義子を学校へ迎えに行ってくれる。私はそんな主人に頼りきって何の苦労もなかった。ただ、冬の寒さだけは厳しくて身にこたえた。

昭和二十年に入ると、赤紙とよばれる紙きれ一枚が人々を不安にした。そして、主人にもその赤紙が届き、とうとうその日がきた。子供たちに別れを告げ、きつと後ろ髪を引かれる思いで出征して行ったに違いない。

八月には三分屯に入居した十家族の戸主は出征し一人もいなくなってしまう。電気がなくラジオも聞けないので、国の緊迫している情勢などほとんど知らなかった。夫の出征後の留守家族は、小さい子供と若妻だけ。皆、途方に暮れた。

八月十二日、朝食の用意ができ、何気なく窓から丘の方に目を向けると、白馬に乗った人がこっちに向かって走ってくる。その馬はやがて私の家の前に止まった。

降りてきたのは現地の役人で、いきなり今日十二時までに三、四日分の食糧を持って八虎力駅に集合するように、と言い残して去っていった。

私は、そのことを伝えるために三分屯の中を走り、その足で小作人の集落に行つて荷造りを手伝ってくれるように頼み、馬車で来てもらった。小作人の奥さんたちは、ただならぬことと思つたのか、荷物を整え子供の身支度も手伝ってくれた。ただ突然のことでオロオロするばかりの私は、この夫婦に支えられ、駅に向かった。

※小作人…121ページの注を参照。

※赤紙…臨時召集令状のこと。兵役義務のあるものを入隊させる命令書。

※出征…23ページの注を参照。

曇つていた空は雨になり、馬車はぬかるみながらも駅にたどり着いた。道々、小作人は、

「畑は俺にまかせておけ。財産はきつと守つてやる。必ず帰つてくるように」と涙ながらに何回も言う。私もすぐに帰れると思つていたので、留守を頼んで別れた。駅はもう人と荷物で埋め尽くされ、人々は雨にぬれながら青ざめた顔をひきつらせてたたずんでいた。私は体中に鳥肌が立つのを感じながら、何かは分からないが、ただならぬことが起こっているのを感じていた。

夕暮れになり、ようやくホームに入ってきた汽車は、屋根まで人でいっぱいだった。でも、この駅で待つている人の分は確保してあったのか、乗れるには乗れた。

しかし、車内は身動きひとつできないほどだった。外で私たちの後を追ってきた犬が、悲しそうに鳴いている。この犬も私たちが西弥栄に移ったときから一緒だったのだ、汽車の中に入れてやりたかったが、それは許されない。犬の鳴き声は今も私の耳に残っている。

汽車は発車したものの、隣駅で止まり、なぜかそこで降ろされてしまった。仕方なく暗闇の中で夜明けを待ったが、子供は疲れて地べたに寝てしまう。

翌日は晴れたよい天気になった。外を見ていたら、日本人の住宅から家財道具を運び出そうとしている現地人の姿が見えた。昨日出た我家もそうなのかと思ったら、涙がとめどなく流れて仕方がない。この世の中はどうなってしまったのだろうか。戦争の状況など知らされていない私たちには、そんな思いがかけめぐるだけだった。

私たちを乗せた汽車は、日が照れば暑く、雨が降れば田んぼのように水が溜まり、子供の排泄物もまじって汚れはひどくなるばかり。食べ物も残り少なくなってくるので心細い。運転するのは日本人ではないようだ。乗っている者の苦労など知ってか知らずか、それともわざとなのか、本当に気まぐれで駅でもないところをやたらと止まる。野原に止まったので降りて用を足していると、急に動きだすこともあった。

私のように赤ん坊をかかえている者はオシメにも困った。佳木斯駅に着いたら、駅

※小作人：121ページの注を参照。

の周辺はいたる所に火の手があがっているのが見えた。

ホームにいた日本兵が、酒保から持ち出した物だと言って、砂糖や乾パン、かんづめ類を車内に投げ入れて、私たちに元気でいるようにと励ました。その言葉は自分たちの家族に向けて送っているようでもあった。この列車が松花江を渡り終えたら、鉄橋を爆破すると言っていたので、振り返ってみると、ものすごい炎が見えた。ソ連軍の追っ手を阻むためということだった。

無蓋貨車から降り、各自荷物を背負い、子供の手を引いて行列をなして歩く。私も背負った荷物の上に政子を乗せ、義子には玉代を背負わせ、洋子には天気もよく暑い日なのに、着れるだけ身に着けさせ、皆と一緒に歩いた。

そして生まれて初めて見る日本軍の飛行機格納庫を私たちの避難所にした。

そこは、大勢の人でこったがえしていた。一日先に着いた弥栄の人たちと一緒に暮

※酒保：軍隊で、兵営内にある日用品・飲食物の売店。

※無蓋貨車：屋根のない貨車。

らすことになる。この中での生活は風雨にさらされることはないが、北満ほくまんの夜は冷える。コンクリートの上にシートを一枚敷いただけでは、とても寒い。

夜になると、広い庫内のあちこちにローソクの明かりが灯り、その数は日ごとに増えていった。それは弔いとむらひの明かりだった。小さな子供こどもや体の弱っている人が命を奪うばわれる。母親が乳を飲ませたままの姿で息を引きとり、子供はそれとも知らず一生懸命に乳をすっている。周りの人は、手を差し延べてやる気力もなく、気の毒とは思いつながら、見てみぬふりをする。私も心労と栄養不足で乳が出なくなってきた。玉代のまるまると太っていた体がだんだんやせ細っていくのが目に見えてわかる。そんなときに麻疹はしかが流行し、弱っているこの子の体にも容赦ようじやなかった。声が出なくなったのでシワシワの顔は泣いているのか、笑っているのか分からない。この子の命あるうちは、出来る限りのことはしてやりたいとは思うものの、持ちあわせのお金もない。

ただひとつの夜具でもある、義子の防寒外套ぼうかんがいとうを売ってお金を作ったものの、その夜から敷物がなく、ふろしきを敷いたが、そんなものでは寒さはふせげず、子供たちは

おもらしをするようになってしまった。

九月に入ると、夜の寒さも我慢の限界となり、少しでも暖かい所で冬を越そうと、南下する団体が出てきた。一緒にいた弥栄の人たちも大連に向かっていく。その中に主人の兄の家族もいた。一緒にいるときはなにかと心強かったので、別れてしまうと、心の中に大きな穴が開いたような気がするのだった。

弥栄の人たちより何日か遅れて、西弥栄の団体も移動する日があった。その支度をしている最中に、とうとう玉代が息を引きとってしまった。どうしたものかと迷いながらも、とりあえずその子を義子に背負わせ、皆と一緒に夕ぐれの道を、緩化の駅まで歩いた。歩きながら、

「玉代は息をしているよ。死んでいないよ。生きているよ」
と義子が言います。私だって死んだとは信じたくない。主人の留守中に子供を死なせてしまった、申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。

※防寒外套：寒さを防ぐため、衣服の上に着るゆったりした衣服。オーバーコート。

緩化の駅からまた無蓋貨車に詰め込まれ、一息ついたとき、かたわらの荷物の上に寝かせてあつた玉代の手足が動くような気がしてしかたがない。

亡くなった玉代に、ローソクや線香をあげてやることもできないまま、哈爾濱の駅に停車している間に、開拓団員の男性に葬っていただいた。もうそのときは涙も出なかつた。悲しく酷い別れだった。あの子に何も手向けることの出来ない私に出来ることは、手を合わせることだけだった。

満州の首都新京（長春）にたどり着いた。ここへ来るまでに何回となく、車内でソ連兵や満人に強引に物を奪われたが、命だけは取り留めた。

風呂にも入れず、着の身着のまま、栄養不足と恐怖とで目ばかりギョロリとした人々の姿は、異様に見えたであろうが、当時の新京はそんな難民でいっぱいだから、私たちの存在に特別目を向ける人もいない。

私たちも新京に落ち着くことになり、南湖の近くにある学生寮に入った。木造二階建ての建物が三棟あり、そのうちの二棟が私たち西弥栄の二団にあてられた。一階は

物騒だということ、二階を使う。各室六畳、倉島さんの家族と同じ部屋だった。倉島さんの家族と合わせて八人、どの部屋もそのぐらいの人数であったと思う。

今日から畳の上で寝られると思うと嬉しくなる。夜具はなくなると体を寄せあつて寝ると少しは暖かい。でも食糧は全く無い。洋子が、

「西弥栄の家に帰ろう、西弥栄で牛乳を飲もう」

と言ひ出す。幼い子に戦争に負けたと話しても分かるはずがない。子供と一緒に私も泣きたくなった。

西弥栄の家を出るとき、義子が

「この家も動いて一緒に行けたらいいね。そしたらこの中にあるものみんな持って行けるもの」

と言つた言葉を思い出した。本当にそれが出来たら、こんなに着るものや食べるもの

※無蓋貨車…126ページの注を参照。

※満人…満州の人

が足りなくて泣かされることは無かつただろうに。

新京に来て何日か経ったある日、私はとうとう起き上がれなくなってしまった。人より体は大きく、健康には自信があつたはずなのに、どうしたことか。三人の子供のことを考えると、寝てなどいられないと思うのだが、動けず涙が出るばかり。

そんなところへ、知人の畠山さんのご主人がバリカンを借りにきた（私は主人の大切にしていた品なので、荷物の中に入れて持っていたのだ）。私を見て気の毒に思つたのか、

「石井君は、明日はきつと帰ってくるはずだから元氣を出しなさい」と言つて、バリカンを持って出ていった。

私はそんな言葉はあまり気にはしていなかつたのだが、翌日の午後、部屋の外が何となく騒がしい。しばらくして部屋のドアが開き、男の人が入ってきた。

そのころ、私は栄養失調のため目も悪くなつていたので、すぐに人の顔の見分けができなかつたし、やせ細つた顔に不精ヒゲ、最初は誰か分からなかつた。

「失礼ですが、どちら様でしたでしょうか」

一瞬男は深くため息をついた。

「すっかり心配かけたな、俺だよ、俺」

その声は、忘れもしない懐かしい主人の声だ。

「あなたなの？ 本当に……」

それだけ言うのが精一杯で、私は泣きながら主人にしがみついた。

昨日の今日であるから、ただただ驚きと感動でいっぱいだった。

畠山さんも主人が帰ったと聞きつけ、部屋に来てくれた。畠山さんも驚いたである

うが、それをかくすように、

「俺の言ったとおりだろう。俺はうそなんかつかないさ」

と、宮城なまりのその言葉が暖かかった。

主人は軍が解散し、自分に必要なものを持って行ってよいと聞き、仲間の布施さん

と二人で、家族の後を追ったのだそうだ。

だが、行方（ゆくえ）はつかめず、難民（なんみん）の姿（すがた）を見ると、自分の家族と重なり、つい持っている食糧（じよくりょう）をわけてやってしまったので、ここまで背（せ）にしてきた吠（かます）の中には、粟（あわ）が少々入っているだけだった。

汽車には乗れず、線路伝いに歩いてきたという。私は玉代（わたじ）の死、それから財産（ざいさん）をなんにも持ち出せなかったことをわびた。主人は子供（こども）の顔を見てうなずいた。

私は主人（わたし）が帰ったので気が楽になったせいか、日ごとに元気になり、外へ働きに出られるようにまで回復（がいかく）した。

ソ連兵がめぼしい物をまきあげにやってくる。部屋に押し入れられても持っていける物はない。本当に生きた心地がしなないとはこういうことかと思つた。また、若い女性（せい）を探（さが）しまわり、所かまわず自分の欲望（ぶくぼう）を満たそうとする。そんなのに捕（つか）まったら災（さい）難（なん）だから顔に炭をぬったり、坊主頭（ぼうずあたま）になつたりした。

主人は体が弱つていたので働くことも思うにまかせなかつた。そこで私は、従兄（いとこ）が新京（しんきやう）にいることを思い出し、主人に捜（さが）してもらつた。新京（しんきやう）というだけで捜（さが）せるかと心

配したが、夕方主人は従兄を連れてきた。これにはびっくりした。

従兄は私たちの様子を見て、放つてはおけないと思ったのだろう。すぐに私の家族を自宅に連れて帰り、風呂に入れさせ、米のごはんの食事をさせてくれ、その夜は布団で休ませてくれた。

たとえ束の間であっても、この幸せは私たちに活力を与えてくれた。あかで石炭のように黒く光る私たちの体を、いやな顔もせず家の中に入れてくださったありがたいさは今でも忘れられない。

二日ぐらいお世話になって、また寮の方に戻り、自活するために、豆腐売りを始めた。朝まだ暗いうちに満人の店に行き、豆腐を仕入れ、それを背負って日本人宅へ売りにいく。まあなんとか生活の足しになり、主食の高梁も買うことができた。

※吹：わらむしろを二つ折りにして両端を縄でとじた、石炭や穀物を入れる袋。

※粟：73ページの注を参照。

※満人：131ページの注を参照。

※高梁：53ページの注を参照。

厳しい冬に身をならし、昭和二十一年を迎えた。ひなたで暇さえあればしらみとり。そのしらみによる発疹チフスが広まりはじめた。私もその病気にかかり高熱が続き、医者や薬も無く死の入口までいった。しかし幸運にも回復することが出来た。この地へ来てからもそういった病気などによる死者は多かった。

六月に入つたころ、主人がとうとう寝込んでしまう。たしかに体調はよくなかったが、それに加えてほかの病気を併発したのだろうか。開拓団員の方が病院に入れてくだされた。皆、大きな病院をたよつて集まるのか、患者であふれんばかりである。

主人のとなりに二十歳にもならない青年が寝ていた。私が主人に食事を口に運んでやっていると、それを見ていたのか、

「おばさん、少しでいいから僕にも食べさせて」

と言うのだ。あまり多くはあげられないが、分けて口の中に入れてやると、とても喜んでいた。身内はいるのか分からないが、一人さびしそうに寝ている姿がかわいそうであつた。

ある日、そのベッドが空いているので、不思議に思つて捜しにいったら、洗い場につながるその通路脇に、まるで不用物を捨てるようにでも床の上に転がっているものがある。それはあの青年の死体だった。この人にも肉親はいるであろう。その人たちの元へこの様子を伝えてくれる人はいるのであろうかと思つと、かわいそうで涙が止まらなかつた。

そのうちに、入院していた主人もなんとか起き上がれるようになり、退院することが出来た。

そして六月も終わるころ、いよいよ帰国できるらしいので、証明書を作るため、そこに添付する写真を撮つた。

病氣上がりの主人の写真は、痛々しく哀れでならなかつた。ここを出る前にお世話になつた従兄の家に行った。従兄はとても喜んで、

「内地で会おう」

と言つてくれた。お金を少し都合してもらい、日本の土を踏むまでの支えとした。

こうして、毎日生と死の間の細くもろい糸をいたわりながら送った日々あしあとの足跡と、無念にもここで息を引き取られた人のなきがらを残して、この新京しんきやうを去った。

その後、私たちは錦州きんしゅうへ向かった。乗り物は、やはり無蓋貨車むがいかしゃ。乗車する前からおなかの調子が悪く、便所通いをしていた主人は、子供こどもと別れて特別の箱に乘せられた。とても水をほしがり、キュウリが食べたいと言うのだが、与あたえてはいけなと言われたので、どうしたらよいか迷った。苦しんでいるのに何もしてやることができな
いのは辛い。ただただ心の中で助けてくださいと祈いのるばかりであった。だが、その祈りさえもかなわず、主人は子供こどもを私わたしに預あずけて旅立ってしまった。

こんなことならあんなに食べたがっていたキュウリを食べさせてあげればよかった。後悔こうかいは後悔こうかいを呼び、子供こどもさえいなくなったら夫の後を追って死にたいと思った。しかし、三人の子供こどもと共に生きていかなくはならない。

「どう生きていけばいいのか、誰だれを頼たよれと言うのか」
と叫さけんでみたかった。

夫の遺体は、もうここには置けない。伝染病であれば、なおさらのこと。

野原で停車したので、布施さんが貨車からおろして、くぼ地の所へ主人と、他人の遺体を置き、その上に草をのせてくれたという。穴を掘るにも道具がない。いつ出発するか分からない停車では、これが精いっぱいであった。

線香一本手向けることも出来なかった悲しさは今も消えない。主人に申し訳なく思しながら、動く列車に身をまかせた。

昭和二十一年七月二十日夜明け前。享年三十五歳。死因は伝染病であるコレラ。

錦州で乗船を待つ

錦州の難民収容所は、日本の軍営の中の厩であった。中央に通路があり、両側のコ

※無蓋貨車：126ページの注を参照。

※軍営：軍隊の陣営。兵営。

※厩：馬を飼う小屋。

ンクリートが傾斜けいしやしているのは馬の排泄物はいせつぶつを流すためであろう。またもやコンクリートの上の生活である。手足も自由じゆうにのばせないほど詰め込まれ、水分ばかりのような給食が配られる。船に乗るまでの我慢がまんと皆みんな、自分に言いきかせる。

朝、元氣そうに見えた人が夕方下痢げりに苦しみ、そして翌朝よくあさは死体置場に並べられていた。これはコレラげんいんが原因だった。どれほどの人が命を落としたであろうか。死体置場は出入口にあるため、見ないでは通れない。DDTざつちゅうざい（殺虫剤）を全身にふきかけられ、粉まみれになって土間に転がっている。いつも十体以上はあったような気がする。野辺へ送る人も毎日大変だった。

昨日きのう置いてきた遺体いたいの所に次の日に行くと、その遺体いたいがつけていた衣類は、何もなく、だれもが丸裸まるはだか。死体から衣服などをはぎとり、身につけていた人がいたようだ。

学徒動員まんとどうで満州まんしゅうに渡ったのか、学生らしい青年も一緒いっしょに生活していた。その一人が「おばさん水をください」

と言って、弁当箱を差し出すのだが、生水は禁じられているので、飲ますことはできない。

しばらくしてその人を見たら、弁当箱を持ったまま死んでいた。そんな光景は毎日だから、明日は我が身かと震えてくる。コレラがおさまらない限り乗船できない。時々検便が行われた。

いよいよその日が来たらしく、コロ島に向かう汽車に乗る。これがまた大変なことで、無蓋貨車よりもっと悪い。木材を運ぶ側面のない台車である。もはやそのころの私たちは人間ではなく、動物以下の木材のような、ただの荷物にすぎなかったのである。

台車上の大人は荷物と子供を中心に置き、ふりおとされぬよう、必死にしがみついていた。

コロ島を後にして

コロ島の埠頭には、私たちの乗る船が停泊している。この船を皆待ちわびていたのだ。食べ物がなく空腹をかかえて寝たとき、病の床でうなされていたとき、冬の寒さでふるえたとき、ひなたで暖をとりながらも、船に乗れる日ばかりを願っていた。今、その念願かなって日本に向かつて動き出す。

甲板に立った人々は離れていく大陸に目をやり、涙を流す人、声をあげて泣く人、歌を歌う人、手を合わせる人、叫ぶ人、まさに十人十色、心の中にうずまくものも十色であろう。私も主人や子供、同胞の屍を大陸に残して帰るのが辛くて泣いた。

広い海は、人間が起こしたおろかな戦争を、どう思っているだろうか？

(原作 石井フヂ「満州開拓花嫁」)